

日光白根火山の噴火記録集

Eruption and volcanic activity documents of Nikko-Shirane Volcano

及川輝樹(OIKAWA Teruki)*

* 地質調査総合センター(GSI/AIST)

はじめに

日光白根火山の、17世紀以降における地表面に現れた、火山活動の記録を抜書き集としてまとめた。なお、震災予防調査会(1918)などで17世紀以前の日光白根山の噴火記録とされてきたものは、9世紀のものは寺社の官位授与や昇官のみが記されたもので、噴火記録とは言い難い。また、1625(寛政二)年噴火記録は、原典とされる『日光山志』にその記録はないため、誤記と考えられる。そのため、ここでは取り上げない。

ここで噴火記録として採録したのは、『日光山満願寺勝成院堂社建立記』および『日光山志』中の江戸時代の慶安二(1649)年噴火の記録および『公文録』や『官報』などの公文書に記された明治期の活動の記録(1872年5月噴煙活動, 1873年3月, 1889年12月, 1890年8月の噴火, 1890年10~12月噴煙活動・鳴動)について活字化して抜書きしたものである。

なお、各記録の題名は、収蔵機関や出典に記されたものに従った。題名はいずれも『』で括って記す。本記録集に採録した抜書きについては、本文中のカタカナはひらがなに変換し、読み取り不明の字は□として記した。句読点などの表記は原文に従ったが、改行部分には句点「。」を加えた。また添え字は[]で括って記した。本文中の暦表示は、基本、和暦表記の場合は漢数字、西暦の場合はアラビア数字で記す。明治五年十二月三日まで太陰暦が使用されていたので、それ以前の和暦

を西暦で表記する場合は太陽暦(グレゴリオ暦)に変換して記している。

採録した記録について

A. 慶安二(1649)年の噴火記録について

慶安二(1649)年の噴火記録としては、1.『日光山満願寺勝成院堂社建立記』、2.『日光山志』があげられる。1の記録は日光市史史料編上巻(日光市史編纂委員会, 1986a)、2は日光市史史料編中巻(日光市史編纂委員会, 1986b)中の翻刻文から噴火について記された部分を抜書きした。

1.『日光山満願寺勝成院堂社建立記』は、元禄十(1697)年に成立した日光山内の地誌である。輪王寺宮の仰を受け、修学院僧正玄海、大楽院法印全海、南松院法印見雄、御光院法印賢俊らが評議して草稿を作った旨の奥書がある(日光市史編纂委員会, 1986a)。なお、「満願寺」は現在の日光山輪王寺の旧名である。慶安二(1649)年の噴火から約50年後に編纂された史資料であるので、噴火と同時代の史資料である。また、日光白根山は日光山の支配地であるので、その記述の信ぴょう性は高いと考えられる。なお、噴火についての記述は『白根嶽』の項に記されている。

2.『日光山志』は、植田孟縉(もうしん, 1774~1843)の撰で、天保七(1836)年に江戸幕府に提出され天保八(1837)年に出版された、日光地域の歴史、伝承、地勢、産物、風俗などをまとめた書物である(日光市史編纂委員会, 1989b; 岩橋, 2016)。この『日光山志』の前文によると、撰者の植田孟縉が日光山内の寺社の古記録をもとに編纂したことが記されている。植田孟縉は、生涯に14回日光勤番を勤めていたので(例えば, 岩橋, 2016)、日光山内に残された詳しい記録をみるとも可能であったと考えられる。しかし、慶安二(1649)年の噴火は、『日光山志』成立より200年近く前に起こった噴火である。そのため『日光山志』の記述は、噴火を直接体験した人や同時代の人が記録したものではない。おそらく先に上げた『日光山満願寺勝成院堂社建立記』などの記録を基に再編したものであろう。そのため、記述の信頼

性は『日光山満願寺勝成院堂社建立記』と比べて劣る。なお、噴火についての記述は『前白根』の項に記されている。

B. 明治期(19世紀)の噴火記録

明治期の噴火は、公文書である『公文録』や『官報』中に記録されている。これらは『公文録』については国立公文書館のデジタルライブラリー、『官報』については国会図書館デジタルコレクションで閲覧できる。採録したのは、1872(明治五)年5月の噴煙発生、1873(明治六)年3月、1899(明治二十二)年12月、1890(明治二十三)年8月の噴火の記録、1890年10月の噴煙・鳴動などの記録である。記録の具体的な題名などは、以下に収蔵機関がつけた題名に従い、『』をつけて記す。なお、1872年5月の記録については、当時あったが今は国立公文書館などに残されていない、公文書の抜き書きが震災予防調査会(1918)に採録されているので、それも採録した。

1872年5月の噴煙発生の記録は、『公文録』の『明治五年・第九十八巻・壬申六月～七月・諸県伺(六月・七月)』中の1.『群馬県管内荒山噴火届』(国立公文書館蔵)、震災予防調査会(1918)採録の2.『沼田支所より明治五年壬申六月十四日付を以て群馬県へ差出だせる報告適用』及び3.『笠原宜喜、中澤清久の復命書適用』である。

1873年3月の噴火の記録は、『公文録』の『明治六年・第百十七巻・明治六年三月・大蔵省伺(四)』中の4.『栃木県下白根山震動届』(国立公文書館蔵)、『公文録』の『明治六年・第百十七巻・明治六年三月・大蔵省伺(四)』中の5.『埼玉県下利根川筋異状届』、『公文録』の『明治六年・第百十七巻・明治六年三月・大蔵省伺(四)』中の6.『群馬県下山抜ケ届』、『明治六年・第百十九巻・明治六年四月・大蔵省伺(一)』中の7.『群馬県下荒山崩陥届』(以上、国立公文書館蔵)である。

1889年12月の噴火の記録は、『官報 1935号(明治二十二年十二月九日)』の『雑事』中の8.『噴火電報』、『官報 1936号(明治二十二年十二月十日)』の『雑事』中の9.『白根山噴火』、『官報 1942号(明治二十二年十二月十七日)』の『雑事』中

の10.『白根山噴火続報』(以上, 国会図書館蔵)である.

1890年8月の噴火の記録は,『官報 2152号(明治二十三年八月三十日)』の『雑事』中の11.『白根山噴火』,『官報 2155号(明治二十三年九月三日)』の『雑事』中の12.『白根山噴火詳報』(以上, 国会図書館蔵)である.

1890年10～12月の噴煙・鳴動の記録は,『官報 2252号(明治二十四年一月四日)』の『雑事』中の13.『奥白根山鳴動實況探求』(以上, 国会図書館蔵)である.

なお, 国立公文書館収蔵の『太政類典』にも1872年5月の記録として『太政類典・外編・明治四年～明治十年・非常部・非常部』中に『群馬県下上野国荒山々腹ヨリ火煙ヲ噴出ス』, 1873年3月の記録として『太政類典・外編・明治四年～明治十年・非常部・非常部』中に『椽木県白根山硫気噴揚』と『熊谷県下上野国荒山噴火』などが残る. しかし, いずれも『公文録』の内容を再録したものなので, ここでは取り上げない.

また20世紀以降の日光白根山の火山活動については, 地震活動など以外の地表面に現れた現象として, 1952(昭和二十七年)年7～9月の噴煙活動の活発化が知られている(中央气象台, 1952). その記録も付録として巻末に採録した.

文献

中央气象台(1952)火山現象. 気象要覧, 第637号, 61-62.

岩橋清美(2016)近世日光をめぐる歴史意識-『日光山志』・『日光巡拝図誌』を中心として-. 国文学研究資料館紀要, no. 42, 61-90.

日光市史編纂委員会(1986a)日光市史史料編上巻. 日光市, 870p.

日光市史編纂委員会(1986b)日光市史史料編中巻. 日光市, 1329p.

震災予防調査会(1918)日本噴火志(上編). 震災予防調査会報告, no.86, 236p.

日光白根火山 噴火記録集

A. 江戸時代の1649年噴火の記録

1. 『日光山満願寺勝成院堂社建立記』

白根嶽 中禅寺の西、湯本より四里半余、本地十一面観音、絶頂に魔海・仏海と云
両湖あり、山の半腹、大八葉と云、夏峰柴宿の旧跡、半腹に彼走石と宿と云旧跡あ
り、慶安二年巳丑八月七日辰刻、此嶽夥敷振動、山下論国地震の如し、絶頂二つ
に焼破れ、其辺山々・赤沼原、灰積事に三尺、当山隣国まで灰降り、温泉の香遙に
薫す、煙夥敷立、日夜震動する事数日不止、仍て 御座主毘沙門堂公海大僧正山
中の総徒に命して、九月中旬、新宮拝殿に於て八講執行せしむ、一坊は三仏堂に
於て法華読誦、

中禅寺小聖籠衆・寺湯守不残召連、絶頂に登て、大破の岩嶮の底へ八講法会の妙
典奉納す、絶頂焼破相分る事二町余、底は如岩嶮、見下すに幾十丈と云事計り難
し、煙夥敷立登、冷敷事言語を絶すと云、往古勧請の石の宮殿、焼落て見へず、二
世大楽院恵海、武州鑄物師椎名山城に命し、唐金宮殿一字鑄立之、承応元年壬
辰十月九日、恵海法印、弟子・同宿・湯守等を召し連、絶頂に登りて、新造の宮殿
に遷座し奉る、

2. 『日光山志』

絶頂に日光権現を祀れる社あり。茲にて白根権現と崇む。社は唐銅にて造れり。承
応元年奉納の銘有り。此山嶺焼出せしは、慶安二年のことなるに、震動日を経て不
止、当座御座主命じ給ひ、新宮拝殿にて八講御修行、或は妙典を誦せさせ給ひけ
る。其時絶頂焼け破れ、赤沼原辺へ、焼灰二三尺余積り、上州又は会津領へも降り
ける由。焼け破れし所二町許の岩穴となり、深さ何十丈というに知らず。往昔より勧
請ありし石宮も、此時窟中へ陥りけるゆゑ、唐銅に造りて奉納るといふ。

B. 明治年間の記録

①明治五年四月八九日(1872年5月14・15日)より噴煙増大関連の記録

1. 『群馬県管内荒山噴火届』* 文書以外に絵図も国立公文書館に所蔵されている。

當管下上野國利根郡東小川村地内荒山西面山腹より硫黄氣燃立候趣別紙の通圖面并燒場石共相添届出候に付直に官員差遣見分爲致候處右の通相違無之に付此御届申上候以上

壬申六月 群馬縣

史官御中

御支配所利根郡東小川村役人總代元副長新井伊一郎奉申上候當村地内荒山の儀は絶頂に荒山神社五御鎮坐にて毎年六月十八日草分と唱ひ役人共一同登山仕候定例にて人家より五里程相隔上下野州の國榊東麓は野州中禅寺西麓は則東小川村にて片品川原流に御坐候右荒山元來硫黄氣多く東西兩麓に温泉有之山六七分以上は草木不生立程の燒山に候へ共硫黄氣燃立初め其後折節鳴動致し追々煙吹出し候場所廣く相成候に付天明度淺間山燒崩候災難を追憶し恐怖の至に付役人共申合登山仕見届候處山中央に有の拜所と唱ひ候場所より九三四十間餘の場所より煙吹出候に付萬々一右淺間山の如き變災を裳り候哉も難計一同心配罷在候に付粗繪圖面相添不取敢御届奉申上候

右

明治五壬申六月十二日 新井伊一郎

群馬縣

沼田御役所

2. 『沼田支所より明治五年壬申六月十四日付を以て群馬県へ差出だせる報告摘要』

上州利根群東小川村内荒山(野州にては白根山と称す)四月上旬より煙相立折々鳴動致し候に付き本月七日捕亡手のもの兩人取締旁為見分差違候處、従前煙相立候儀見聞不致、今般の儀も四月八日頃より煙相立候を見付候にて何月頃より右の次第に候哉不分明の趣申之…

3. 『笠原宜喜、中澤清久の復命書摘要』

四月八九日頃より焼出し候に付……篤と見分仕候處全く別紙麤絵図の通山の西南中腹縦横百五十間餘の場所石間より煙吹出し全く硫黄の気にて相焼候儀に有之候……

②明治六(1873)年三月十二日(1873年3月12日)の噴火の記録

4. 『栃木県下白根山震動届』

野州白根山に方り震動奇變の儀

御届

栃木縣より別紙寫の通届出候間為御心得此段上陳仕候也

明治六年三月廿日 洪澤正五位

正院御中

野州白根山に方り震動等有之候儀

御届申上候書付

當三月十二日午後三時頃日光黒髮山續き戌亥白根山に方り俄に砂烟を颯揚し蒼天も黒色と變し端なく震動相發り其響輕雷の如くなれも天地に轟き硫黄の臭気ある灰を兩下すること六時間にて人々恐愕罷在候其節白根山に景況烟火の如く相見え候故當管下野州都賀郡蓮花石村より届出申候許細の儀は實地取調の上可申上候へも不取敢此段御届以上

明治六年三月 栃木縣七等出仕柳川安尚

栃木縣参事藤川為親

栃木縣令鍋島幹

井上大蔵大輔殿

5. 『群馬県下山拔ケ届』

群馬縣より別紙寫し通届出候間為御心得上陳上仕候也

明治六年三月廿二日 澁澤栄一

正院御中

山抜きの儀に付御届書

當三月十三日頃より利根川俄に相濁り魚類等死流致し儀に付非情の儀と相心得夫々為取調候處兼て昨壬申六月中噴火致し候段御届申上候當國利根郡荒山焚抜け片品川へ押込み候由に候へも其源に至ては煙霧蒙昧にして何分實地の見分不行届候間尚取調委細可申上候へも此不敢御届申上候也

明治六年三月十五日 群馬縣七等出仕加藤祖一

群馬縣権参事堀小四郎

群馬縣令河瀬秀治

大蔵大輔井上馨殿

6. 『埼玉県下利根川筋異状届』

埼玉縣管下利根川筋異状の儀別紙の通届出候に付入御一覽候也

明治六年三月 澁澤栄一

正院御中

利根川筋異状御届

管下利根川筋本月十四日午後第十二時頃より追々相濁り就中硫黄を含十五日に至り彌甚敷満川等一の趣に御御坐候川上硫山崩裂致し候儀にも可有之哉其原由未詳候へも介鱗頻りに浮流候段右川緑村々より申出候条不取敢此段御届申上候

以上

三月十八日 埼玉縣権参事大山成美

埼玉縣参事白根多助

埼玉縣令野村盛秀

大蔵大輔井上馨殿

7. 『群馬県下荒山崩陥届』

群馬縣管下野州荒山崩陥の儀に付別紙の通届出候に付書類并繪圖面三葉相添え供御一覽候也

明治六年四月十五日 井上大蔵大輔

正院御中

繪圖面闕

荒山崩陥御届

本縣管下上野國利根郡東小川村地内荒山本月十三日鳴動崩陥の趣に付早速官員差向検査爲仕候處元より無民家の地に付人馬并民家も流失仕候儀は勿論目今水害等も無之趣別紙通申立候に付則見聞書見取繪圖並焼出の石相添此段申上候以上

明治六年三月廿五日 群馬縣七等出仕加藤祖一

群馬縣権参事堀小四郎

群馬縣令加瀬秀治

大蔵大輔井上馨殿

噴火山見分書

御管下上州利根郡東小川村地内荒山洞出候趣去る十六日届出候に付即日
 十八日彼地へ出張尋問検査仕候處元と荒山の儀は野州は國境にて本州にて荒山
 野州にて白根山と相唱え異名同山に御座候右昨六月中御届ヶ相成候通噴火山に
 て發煙依頼格別の變動も無之處本月十二日午後第一時頃俄に荒山の方に當鳴動
 劇しく民家の戸障子等悉く轟き候に付一同地震と在し戸外へ馳出恐怖罷在走路内
 忽ち仁賀又溪にがまたたにより巨石游泥山を成し流れ来り硫黄臭の烟煙人鼻を刺戟して殆んど
 窒息せんとす一同狼狽銘々山に攀ち登り危難を避け様子を望候處前川磊々たる巨
 石砂礫のみ暫時奔流次第に泥土熱湯相混し少しく景色静定の様子に付一同聊安
 堵仕候處三時頃又々響動地轟き大木巨根立を成し陸續として流出候次第にて此
 上如何の變動難計と人々戦慄罷在候内追々様子亘敷其夜並翌朝時々鳴動有之
 候へも格別の儀も無之追々砂礫も相減し當今は灰色の濁水のみ相流れ居先々安
 心候へも未だ沼川の者も歸家不在尤右變動に付人馬并民家等流出仕候儀は一切
 無之趣申聞候に付場所夫々検査仕其縁源を究可申と存じ小川村内仁賀又溪字三
 ノけいど越度まで罷越候處別紙繪圖面張紙の通噴出の游泥進路を埋没し殊に推積の粘
 土未だ泥濘脚を没し候次第にて何分進歩候仕兼依て荒山崩陥の場所遠望候處本
 山西北の中腹二ヶ所盛に噴煙昇登新に二溪を生し右場所を去る凡三四里程三ノ
 越度と申所従前一丈五六尺ノ瀑布有之候由今日見分候へも土石の為の潰没更に
 跡なく其より二三町を去り一ノ越度并本谷流落合の處前々尤深淵の由目今返て平
 地より高き事凡三四尺依て本谷流山口此の隆起立岡の為め水流を障け候に付湫
 留小沼を現生仕巨石大木の如きは此邊尤推積夥しく夫より御坐入村須賀川村迄
 (凡そ四里)各所散在其巨石の大き九尺立方の如きあり大木の如きは悉く雷撃を受
 る如く破碎振折し有之東小川村より追貝村迄(凡六里)川底陥凹の處大凡土砂の為
 めに平坦に變し全川の河魚悉く死浮申候次第に御坐候へも田畑投潰没仕候場所
 一切無之且此分にては敢て格別の水害も有之間敷奉在候乍去人心于今恐々罷在

候間夫々慰撫猶山上異變有之候は無害の近村へ申通し夫より速に申出候様申付
置き候前川筋見分中硫化物礦石の類も可有之と注意探索仕候處尋常一般の焼石
泥中聊硫黄を混し候迄にて別段相替り候物品も無之候依て繪圖面并焼出の石相
添此段申上候以上

明治六年三月廿日 十等出仕金子精一

大属大久保適齋

七等出仕加藤祖一殿

③明治二十二(1889)年十二月五日の噴火の記録

8. 『噴火電報』(官報 1935号(明治二十二年十二月九日))

噴火電報 栃木縣一昨七日午後一時十八分發白根山噴火に係る電報は左の如し

日光山脈白根山去る六年噴火の場所より本月五日曉再ひ噴火「ちうぐうしせんちようがはら」日光、今市邊へ砂の如き灰を降らす爾後異状なし噴火口は群馬縣下へ向へり

又群馬縣一昨七日午後二時十分發同上に係る電報は左の如し

本月五日曉利根郡白根山噴火す人畜死傷なし委細は郵報す

9. 『白根山噴火』(官報 1936号(明治二十二年十二月十日))

本月5日上野、下野兩國境なる白根山噴火のことは昨九日の本欄に栃木、群馬兩縣の電報を掲載せしか今兩縣の詳況報告に接したるえを以て左に掲載す。

群馬縣利根郡片品川は本月五日午前六時頃俄然水色を變し□も□灰を流すか如く臭氣最も甚だしく同郡東片品兩村長より利根北勢多群衛に急報せしに依り郡史派出し利根片品兩川落合(同郡利南村大字戸鹿野村)に至り調査せしむるに非常の濁水にして一見火山の噴火せしためなるを知る而して同地近傍人民の初て之を認知したるは五日夜半(午後十二時頃)なりと云う併し郡史派出の際は最初より少々清透に至れりと云へり之を往年噴出當時に徴するに今を距る十七年前即ち明治六年の噴出と其狀況異なるなし而して六年にありしては二月中春暖融雪の頃にして昨今の如き極寒の氣節にあらざるを以て考ふれば噴出の何に原因せしや詳ならず同六日午後片品村大字越本村人民の報告する概況は左の如し(群馬縣)

四日夜中遠雷の如き鳴動あり終夜其響を然れども安眠し能はざる程の酷しき事にもあらざりしと云ふ(本村は白根山とは殆ど七里を距る)人畜に死傷なし白根山下温泉番人は同夜辛くして越本村に踏れり同所の湯壺は悉皆噴出泥土のために埋没し□に該土は床上三尺餘に及へりと至ふ」水量は東小川越本川の落口に至りたるとき

(六日の朝)幾分か減少せり是れ水原泥土のため河身を塞ぎ一時餘水四方に氾濫したるに因るならん又魚類は悉皆浮流域は陸に躍上りて死せりと云う」季候は二日雪三日午前十時頃降雨午後三時に至り雪に變し四日又雨となり暖氣を覺へたりと云う」前兆は別に著しきことなかりしと云う」東村大字東小川村字上小川に住する二十三戸人民は始め鳴動を聞くや如何なる變を來すも計り難く一時は人心愕々頗る動揺せりと云う」利根北勢多郡役所(利根郡沼田町にあり)に於て調査(正午摂氏)せる温度は一日十四度、二日十二度、三日十二度、四日十二度、五日十四度、六日十二度にして一日より五日までは天気快晴三日夜半より四日朝まで降雪六日朝小雪あり

又栃木縣上都賀郡日光町の奥白根山は前白根奥白根と稱し二峰屹峙せる高嶺にして明治六年六月十二日奥白根より噴火し群馬縣下上野國小川村地方は當時頗る損害を被りしと云へり然るに本月五日拂曉同山より前年の如く小川村邊へ向ひて噴火し日光入字戰場ヶ原中央より湯の瀑下邊凡そ二十四五町間及日光町より今市町近傍に至るまで藍色にして硫黄質を含みたる細砂の如き灰を降らしたり就中降灰の多き所は字古賀谷林の入り口にして積量凡そ二分餘地面を覆へり然れども中宮司及湯本邊は却て降灰を見ず又此噴火に先ち凡の三十分間餘前湯本及中宮司入字菖蒲ヶ濱に於いては頗る鳴動ありしか菖蒲ヶ濱邊は頗る激烈なりしと云へり今奥日光山の絶頂を東方より遠見するに其西方に於て二三分時間毎に黒煙を噴出するを見認むと云う(栃木縣)

10. 『白根山噴火続報』(官報1942号(明治二十二年十二月十七日))

群馬縣利根郡白根山噴火の事は本月九、十兩日の本欄に掲載せしか今同火山地元片品村大字東小川村當時の状況を挙げしに本月一日より三日まで寒暖計(華氏)四十度、四日五日は三十度より三十五度を昇降し始終晴天なりすも四日に至り曇天と爲り續て雨及雪と爲れり別に鳴動地震等の前兆なし同五日午前四時頃突然白根山の方位に當り鳴動すること凡そ十分間にして之と同時に山下を流るる河川水は皆濁水と爲り同六時頃までは依然流通せしも同六時三十分頃に至り其流通を絶て

り是噴出せし土石川身を塞きたるに因ならん村民其原因をしらず將に大害の來らんを恐れ婦女子の如き字中原(字赤澤より凡そ千三百間餘あり)まで立退き一時頗る動揺せりと云う然るに同七時頃に至り河水の疏通したるを以て村民始て安堵し漸々家に歸れり字赤澤温泉人家に於ては床上の水量四尺餘に至れりと云う但し被害の模様等は目下専を調査中なり(群馬縣)

④明治二十三(1890)年 8 月 22 日噴火

11. 『白根山噴火』(官報 2152号(明治二十三年八月三十日))

「群馬県に於て本月二十一日午後一時より雷雨甚しく翌二十二日降雨尚ほ前日の如く午前十一時頃白根山噴火し午後四時三十分頃に至り小川に濁水の流出を見る尤も昨年噴出の状に比すれば三分の二に過ぎず且人畜被害なし詳細は取調の上報告すへし(群馬県)」

12. 『白根山噴火詳報』(官報 2155号(明治二十三年九月三日))

「群馬縣利根郡白根山噴火の概況は去月三十日の本欄に掲げしか今其噴火前後の形状を始め詳細にこの景況を左に掲ぐ。(群馬縣)

去月二十一日午後一時頃より雷鳴降雨同六時三十分頃まで殊に甚しく同七時二十分頃に至り雷止む然れども降雨益々烈しく翌二十二日に至り漸く口れ同日午後三時頃に至り全く止む。

噴火は二十二日午前十一時頃より始り同日午後三時頃に至り鎮静す然れども砂石を降すことは更になし益し當日南方の強風なりしたため栃木縣かに降下せしならん。

鳴動は二十一日午後八時頃より凡そ十分間程鳴動せり。

白根山下小川の水量は平水より二三尺餘の増加を來し濁水は昨二十二年噴火當時に比すれば硫黄の臭氣稀薄なりしか川魚は孰も沿岸に飛上り終に死せりと云う。」

⑤明治二十三年(1890)10~12月鳴動

13. 『奥白根山鳴動實況探求』(官報 2252号(明治二十四年一月四日))

「栃木県下上都賀群日光町の奥なる白根山は前白根奥白根と帯し二峯屹立せる高山にして奥白根の方は群馬縣下利根郡の境上に聳峙し尤も高峻なる火山なるか古来より度々噴火鳴動等ありて既に明治二十年十二月の如きも近傍数里の間に細砂を降せしか尚昨年十月頃より数回鳴動せし故に付き栃木縣に於ては其實況を探求せんとして去月十三日警部一人を派遣せしに奥白根は溪間堆雪く到底山頭に達する餘はさるを以て出張員は先を前白根より遠望せしと同十六日午前第七時同所字湯本を發し十一時三十分前白根の絶頂に登攀せしか山頂は積雪三尺餘にして寒風殊に甚しく寒暖計は華氏二十度以下を昇降せしも暫く山頭に在りて西北奥白根の方を遠見するに同山の絶頂は草木無く積雪に堆み一望只白雪の瞪々たるを見るのみにて別に異状なし由て途次聞く所の一二を尋くるに同所字中宮祠に於ては昨年十月十三日夜十時頃中宮祠湖岸千手ヵ入にて漁人の露宿せし者奥白根の方に當り鳴動を聞きしより同十一月二十六日に至るまで一晝夜一回若くは兩三回に及びしも時としては鳴動セサルこともありて其變響は凡そ三里餘に渉れりと云へり又同所湯本に於ては去月十三日午後三時三十分頃地變の如き震動ありしか地震には果て雉聲を聞く筈なるに此際雉聲なかりしを見れば或は奥白根の鳴動なをしと云へり又同所に滞在中なる群馬縣下利根郡片品村大字小川の(奥白根の山麓なり)獵師等二人の云う所に據れば今を距る二十年前同山の西北背破烈せしことありしか爾来其所より噴煙常に絶えず殊に天雨を催す時又は雨後の稍々□んとする時は時は鳴動せしありしか昨年十一月三十日前は同人等自家に在りしも鳴動せしや否を覚えされは多少此事ありしもその鳴動は激烈ならざるとへしと云へり右の如くなれば同十月以降数回鳴動せしも其鳴動は激烈ならざりしならん(栃木縣)」

付録

1952(昭和27)年7-9月噴煙活動の記録(中央气象台, 1952)

日光白根山 7 月初め頃から群馬県鎌田から噴煙が見え, 火口の近くではときどき噴煙臭が感ぜられた。今月(著者注:9月)初旬には山ろくで鳴動が聞こえ、とくに25日 1~2 時にはやや強かつたが, 火山には他に異常はなかつた。